

武家名目抄稿

称呼部十七下

卅四

和書門			
二五二〇六	七	七	六
類	架	函	號
四	五	六	七
冊	架	函	號

內閣文庫			
五	四	二	和
三	一	〇	書
函	六	六	類
架	冊	號	類

內閣文庫			
番號	和	25206	
冊數	457 (129)		
函號	153	275	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



武家名目抄稿第卅四冊

称呼部十七下目錄

覺者 又覺人

早雄者

弓矢程者

名譽者

武勇者

重代者

老功者 今无

若者

宗徒者

恩顧者

強打

槍柱

骨切

究竟兵

又称究竟者

打者兵

城兵

精兵	古兵
軍兵	騎兵 今元
馬強	馬上射手
歩兵	番兵
當番衆	結番
雜兵	徒兵
先手之兵	兵士
士卒	輕卒
荒手	

武家名目抄稿第卅四冊

称呼部十七下

覺者 又覺人

伊達日記云十二御成候國王殿卜申子息ヲ
 譜代衆守立義繼イ卜新城彈正卜申兼テ覺
 ノ者主ニ成籠城仕候

甲陽軍鑑云海賊衆國部右多清 船十艘 右國
 部志多清 諸河々々 忠節人々 土屋忠多清
 多清 己の極月 諸河活テテ 土屋備前
 多清 己の内 是の若 右四方 外海 以 右

とき、ハ万右衛門入侍、万右衛門保科、六右衛門
甲陽軍鑑末書云、信玄公暫有テ次郎右衛門小
身ニテカヤウノ行イカサマタ、モノナラス
ト思召此者ヲ助置取立テ先ヲサセ然ヘシト
テ無事ニ被成岡部次郎右衛門ヲ召抱ラレ本地
三百貫ヲ三千貫ニ被成侍五十騎預被下也サ
テ又次郎右衛門弟治部右衛門ヲ如駿府ノ館
ニ籠タル覺ノ者共五六十人スクリ召出サレ
信玄公ヘ御礼申上ル也

又云朝比奈兵衛逆心也ト云ヤ否残二十頭ノ

衆色ヲ立テ別心也信玄公ノ先衆ハ山縣馬場
小山田兵衛尉小幡上総真田源太左衛門同兵
部内藤七頭江尻ヲ越宇八原迄旗先見ユルト
氏真公ノ旗本ニ隨分覺ノ衆アリトイヘ共ウ
チ口替候ヘハ則時ニ御館ヲアケテレトキノ
山家ヘツホミナサレ

武蔵業話云上田王入取宗古ハ嘗ケ系侍陣
の時治部少才ト著故ニ此此記伊多幸長ヲ侍
部一戸存をけり是等明智道人の時大坂より
織田七多信澄の首をたると是の者ニ

又云小田原村の時氏郷内結細十席多傳と
城方桑木相物と結を合多中右の結細十席
多傳の代り莞の者こ又十席多傳ハ江戸勝良
田舎戦子所井久波の多百ハ内務命を討取は
内務命莞の者も名譽の刀を持つ云々
又云如賀利常仁の内大者主多ゆは若傳多中
多ゆ主多傳も人を擡くゆ今ハ走多る
叶あまハこれ身結の手苦つと扱られぬん
んと嘲多主多か曰走りの早きとて治して毎
多事も成るハ結合の時ハ十百十成百ハ多

ゆ人よ先を伝多者ハ多丁十丁多走多る安
し結多十百十五百多走り出多遠者ハ莞此者
に多ありれハ多と云多き元いつ多ハ多口
多

又云可見多於吉長ハ徳多き莞の人毎多は
一物ハ多ハ毎の多と云多所廣多ハ在
一多者老多傳り多多多多時何と多莞此
者多年多るハ多多と云多多擡多る多
多ハ多人と云多老人多れハ氣多かけ多
多多も人よ多ハ多と云多老多中ハ多

而も別の者も是も弱くて付ふ一う
と云々我輩にてまもる人よりふふといふ
味よ老乗まで甲冑多杖首一馬より
り立て走らしたる者も志したる一う
我輩老よ竹内久たるといふ是の者
續武家家談内後家傳云正成と東照宮の
はて是の擧り一是の人也是のかり一
其此信長の家より多士城目録に正成武功
多に一月かきと引取ら正成をいふ是の
一あり

早雄者

太平記云

六波羅
攻祭

信濃守範資鎧踏張左右ヲ顧

テ誰カアルアノ木戸逆木引破テ捨ヨト下知

シケレハ宇野柏原佐用真嶋ノ早リ雄ノ若者

共三百余騎馬ヲ乗捨テ走リ寄

弓矢程之者

武藏叢話云天正六年三月より翌年二月迄哉

後國中から城を踏破止むあり一垣戸城

より上杉謙五郎陣所を宍山乃藤多れハ景虎より

りも大軍に一毎城城より小舟舟後也思

人て泊りあふ末に相討りし能く悔ふ中少糸
相果りし少上杉隆五郎先多より景徳館城へ
寄る館より弓矢の互討れし如叶
し以て上杉憲政と三郎景徳も信濃堀籠ヶ
尾の城へ落しされし

名譽者

伊達日記云彼肥前名譽ノ者ニテ惣團扇休
雪肥前ニ被仰付候者ニ候窪田ノ城ハ飯坂右
近大嶺式部福原ノ城ハ瀬上中務高倉ノ城
ハ大條尾張被遣候本丸ヲ可請取由被仰付

候云々

武勇者

蒲生氏郷記云稲葉伊豫守是ヲ見テ蒲生カ子
ハタニ者ニテハ有マシアレカ一定勝タル武
勇之者ニテナラスンハ成者ハアラシトイハ
レケルト也

重代者

義貞記云情ニ依テ命ヲ失事ナレハ重代ノ者
ニハ唯常ニ目ヲカケ詞ヲ和スヘシ世ヲ治ムル
謀ハ唯礼ト詞ヲ先トス以無益之言人ノ恨ヲ

負事無下ニ無智ナル心ナルヘシ次恩賞事必
譜代ノ人ニヨルヘカラス縦ヒ後参ナリトモ
當時ノ器用ニ隨テ可計宛云々
芝長主録云芝長十六歳十二月二日秀頼公宰
相成少疱瘡少中獲ヒ此祝儀諸何日此使者を
遊佐新左衛門下向是元来河内守代侍也云

若者

甲陽軍鑑末書云晴信公原美濃小幡山城山本
勘介ヲ召テ景虎ハ當年十八歳若者ナレ共人

ニ頼レ出候ヘハ今日必合戦セント存ヘシ晴
信モ義清ニ度ニ勝今度景虎ヲ大形ニ仕リ指
置テハ跡ノ勝利ミナ水ニナル程ニ一戦セン
トキハメテ其方三人物見ニ指越也云々
義光物語云義光公史云我々知トイフモ典孫
大文武子達一たり其者云云上ノ景徳佐
本の家ぢれハ何ともして物意味事にか
さん多め有〜らぬ孫子ノ落〜ぬ也

宗徒

太平記云 千劔破城 赤坂ノ大将金澤右馬助大
軍奈

佛奥州ニ向テ宣ヒケルハ前日赤坂ノ攻落ツ
ル事全ク士卒ノ高名ニ非ス城中ニ構ヲ推シ
出ノ水ヲ留テ候シニ依テ敵程ナク降恭仕候
キ是ヲ以テ此城ヲ見候ニ是程纒ナル山ノ巔
ニ用水有ヘシ共覚候ハス又アケ水ナントヲ
ヨソノ山ヨリ懸ヘキ便モ候ハヌニ城中ニ水
卓散ニ有ケニ見ユルハ如何様東ノ山ノ麓ニ
流タル溪水ヲ夜ニ汲放ト覺テ候アハレ宗
徒ノ人々一兩人ニ仰付ラレテ此水ヲ汲セヌ
様ニ御計候ヘカシト被申ケレハ云々

甲陽軍鑑末書云三増瀬筋ノ様子ヲ生捕ノ郷
人ニ問給ヘハ彼峠ヲ取キル衆ハ北條陸奥守
同弟安房守忍衆深谷江戸川越衆碓氷サクラ
コガ子岩筑北條上総宗徒ノ侍大将合二万餘
三増瀬峠ヲ取切由聞云々
松原自休手録云今般討取ル首記一万三千宗
徒ノ人々ニハ山懸三郎兵衛馬場美濃小幡備
前横田備中真田源太左衛門弟兵部下十二人略之
等也
備前文明乱記云山名入道同心ノ人々先山名

相摸守同修理大夫同七郎洪川治部大輔前司
大内新介河野伊豫守畠山右衛門佐ヲ始トシ
テ其外宗徒ノ大名一味猛勢ニテ公方ノ御堂
ヲ圍ミ申ス

恩顧者

太平記云 本間自 本間山城左衛門ハ多年大佛

奥州貞直ノ恩顧ノ者ニテ殊更近習シケルカ

聊勘氣セラレタル事有テ不被免出仕未已カ

宿所ニソ候ケル云々

強打

奥州後三年記云 武衡ハ少シに龜江并次ト云
二人のおもありありいぢき法をもものあり是
をいぢちと名付し武衡侯を將軍の侍
一つかりて消去していとくたつてやめ
らるる流然かきりあり龜江やいふにうら
ちんけりありて流然かきりあり龜江やいふにうら
あいきぢちとくちありありありありありあり
徒然となくさめらるるけりありありありありあり

槍柱

大友與廢記云 伊東三位入道 伊東方へ使者を

義久与合戦条

出—一戦者のそとをみぬ伊東志のむところ
のさしをむとてあせしをいさうき用定
ありさうと三位内のみむし伊東槍者とて
大割一の勢を—ら有三位後を誅していさう今
日比人数をいされん子少少申のあふらる

骨切

官地論云久安之陣見勢計残置潜ニ忍夜陰紛
額口一手成城衆是不知夢去程及七日之早天
諸勢各揚合度之野狼屎末若闇打立從四方誥
寄同時揚時ノ聲大山為是崩湖水為彼傾忽疑

落輪際城中敲楯鼻調声合時宛如繫布鼓於雷
門如案從城方究竟之骨切二千餘人楯三百帖
計究撰打出

究竟ノ兵 又稱究竟者

伊達日記云御馬二匹御庭へ呼セラレ一匹ハ
義隆一匹ハ刑部御乗セ召連ラレ候刑部ハ刑
部少カ家中ノ者究竟ノモノ共二三十人御座
候刑部少ハ指置義隆御馬ノ口ヲ取御跡先ニ
付御供之衆無用之由申候云々

天正記云 秀吉上洛山 秀吉人数傳申傳前日
崎合戦条

あひおろしもの相見をねわつるに一五よ
きよきに結とくき皆くつきやうのきこ
又云 うれくう 水側の人と家おとくしや水花
をちくしお鏡ふりさつと追あはせ時
明智孫十市松生と一人かありせぬ次をね
くつきやうのき百人をう名のりうけくき
つてかふ

武蔵業話云大坂冬陣と峰次智阿波寺至結
陣一壇園ちの夜討を結一阿波寺家老中村右
通と始尾路の侍二十四人討に難をを殺十人

討移あり
打物兵

播州佐用軍記云 十二月十日 城 小寺蜂須賀山
口梶原ハ東河原工打上リケレ氏余リ無勢成
ハトテ見續居タル所ニ後ヨリ続ク勢有ト見
テサラハ先追カケラレナト勵テ風ノ如ニ足
軽ヲ走ラシメ二陣ニ打物ノ兵ヲ進テ追カケ
タリ

城兵
東迂基業云秀元乃軍士ヨ山根作左衛門三乃

九一、一書に京に於ては、諸將を蒙り、後日
に死にかくて城を三の丸を捨て二の丸へ
引退、秀元の軍士は二の丸へ攻め、一と競ふ
を、けりか、涼子有者多し、て引退は、時城
多し、て返す、命を捨て、、後、、これ、、秀元の
多し、退き、、此、、けり、、を、、秀元、、怒り、
け、向ひ、、き、、あ、、ま、、奴、、系、、う、、れ、、遂、、つ、、よ、、地、、終、、に、、下、、る、
き、れ、、け、、り、、と、、と、、と、

精兵

三代實録云元慶二年夏四月四日己巳出羽國

守正五位下藤原朝臣興世飛驒奏言秋田郡城
邑官舎民家為凶賊所燒亡之狀去月十七日上
奏厥後差權掾正六位上小野朝臣春泉文室真
人有房等授以精兵入城合戰夷黨日加彼衆我
寡城北郡南公私舎宅皆悉燒殘殺虜人物不可
勝計此國器仗多在彼城舉城燒尽一无所取加
之去年不登百姓飢弊差發軍士曾无勇敢望請
隣國援兵勦力襲伐

將門記云常陸國仍國司頻牒送將門伴貞盛脫
追捕踏上道者也公家湏紀其由而還給得理之

官符是尤被矯飾也又右少弁源相職朝臣引仰
旨送書狀詞云依武藏介經基之告狀定可推問
將門之後符已了者待詔使到來之比常陸介
藤原維幾朝臣息男為憲偏假公威只好冤枉
爰依將門從兵藤原玄明之愁將門為聞其事發
向彼國而為憲與貞盛等同心率三千余之精
兵恣下兵庫器仗戎具并楯等挑戰
扶桑略記云天喜五年十一月將軍賴義率兵
千三百余人欲討貞任等爰貞任等引率精兵
四千余人拒戰

陸奥話記云同年十一月將軍率兵千八百余人
欲討貞任宗任等率精兵四千余人以金為行之
河崎柵為營相戰

平家物語云 一 河原兄弟究竟乃弓此上手
之けれ為此 一 つめひきつめぬく少射るは
は者堂一 怨一 討やといふ種とそありは種
又少えく 強子精氣備中國任人志名過四郎
志名過五郎とて兄弟有兄乃四郎とて一谷
少れ多り少五郎ハ生田志少あり等 如是哉
とて能事てひや 一 とて多し河原太郎と種

約板を渡へたつと村板を奪り杖を以てす
むやみやたら

又云 幸矢系 平家太子余艘を三手に法自る先
山賀之旗意次秀幸五百餘艘で先陣を漕向
ふ松浦黨三百余艘で二陣を續く君達二百餘
艘で三陣に續き終ひり申すと山賀之旗
意次秀幸は九玉一の強う勢ありて是れ我不
とこそあられとも普通比中勢五百人す
くつて舟の旗神も立て肩を一面く双つて五
百の矢をつ放すを斬る

兼久物語云 幸矢系は二帝からりともいふ河
乃右帝の中もの廿餘のてきあふが志
と立れんてうあつたを解に記すとも
つむのまきいふつりのやいさくく
も又いさるあまふけうちあふさくく
いさるあまふけうちあふさくく
へあわてうへのの内の内へ記すとも

太平記云 箱根竹下合戦之条 義貞ノ兵ノ中ニ杉原下総
守高田薩摩守義遠葦堀七郎藤田六郎左工門
川波新左衛門藤田三郎左衛門 下十一人略之 トテ黨

ヲ結タル精兵ノ射手十六人アリ一様ニ笠符
ヲ付テ進ニモ同ク進ミ又引取モ共ニ引ケル
間世ノ人此ヲ十六騎カ黨トソ申ケル彼等カ
射手ケル矢ニハ楯モ物具モタマラサリケレ
ハ向フ弓ノ敵ヲ射スカサスト云コトナシ云々
太平記云 本問孫四郎 佐々木筑前守顯信コソ
西國一ノ精兵ニテ候ナレ彼ヲ被召仰付ラレ
候ヘカシト申ケレハケニモトテ佐々木ヲソ
被呼ケル

又云 阿保秋山河 丹ノ黨ニ阿保肥前守忠實ト
原軍条

云ケル兵一騎大勢ノ中ヨリ懸出テ事珍シク
耳ニ立テモ羨ル秋山殿ノ御詞哉是ハ執事ノ
御内ニ阿保肥前守忠實ト申者ニテ候幼稚昔
ヨリ東國ニ居住ノ明暮ハ山野ノ獸ヲ追ヒ江
河ノ鱗ヲ漁テ業トセシ間張良カ一卷ノ書ヲ
モ呉氏孫氏カ傳ヘシ所ヲモ曾テ名ヲ夕ニ不
聞サレ共變化時ニ應メ敵ノ為ニ氣ヲ發スル
処ハ勇士ノ已レト心ニ得ル道ナレハ元弘建
武以後三百余箇度ノ合戦ニ敵ヲ靡ケ御弓ヲ
助ケ強キヲ破リ堅キヲ碎ク事其数ヲ不知白

引ノ精兵畠水練ノ言ニヲツル人非シ忠実カ
手柄ノ程試テ後左様ノ廣言ヲハ吐給ヘト高
ラカニ呼ハテ閑々ト馬ヲソ歩マセタル
応仁記云義就方ノ遊佐河内守馬ヨリ飛下リ
真先ニ進テ懸レハ兵トモ馬ヲ棄放々爭競テ攻
入ル早ヤ馬井ノ脇ノ唱門士村ニ火ヲ懸タリ
折節愛宕山ノ山下風ニ降雪烟トモニ寄手ノ
目口エ吹入テ進退失度默然トシテ迷惑ス此
躰ヲ見テ内ヨリ見スマシ其比無双精兵ノ手
キ、竹田與ニヲ先トシテ指攻引攻矢前ヲソ

口ヘテ射倒云々

江濃記云淺井備前守安養寺三郎左衛門今村
掃部助を色付々々ハ南山のり多め此合戦也
中津井備前守もせん多きをさく歌林在座へ
切てかゝり多れ多し大將義賢忽々打まけ引退
まゝ

寛菴院殿將軍室下記云延文三戊戌年十二月
廿一日自巳刻禁裏法門在為警固冬仕侍
大將以上十二人也大將一人之將兵三百騎
之外精兵多し討手五十騎大將一人之將

合するは十餘にして一門に戦國あり侍大將^李事

是如記之法よりせしむやうとやするは法
よくて物もよくぬくもさうにかやうに
結城戰場物語之城のうちには塚系跡を常宗
田沼助左衛門の跡六塔田の跡をたしめや
してたしめぬあまの精を百余人そらつ
き一つめりつていふやうとせしむ十餘廿餘
きさるはあうりやう
篋子あはれさういふはふいけい

らよりもちんておりさんはんたりよ十三そく
さつてかゝりとうちつひおもてあすむ物を
さうつめひきつめさんいよさうさうせい
ひやうよいこくらきやせえんちんてそえ
えぬりやう

奥羽永慶軍記云 岩崎合戦六郷一味 大膳ハ水瀬川

ヲ渡シ馬ヨリ飛テ下リ川岸ノ一村立タル柳
ノ中ニ入甲ヲ脱捨テ弓押取散ニ射タリケ
リ其外精兵ノ手利七八騎指詰引詰散ニ射
掛ル処ニ鍋倉圖書同金蔵佐藤權左工門小野

寺ニ心替シテ岩崎ニ蒐来リシカ是ハ鉄砲ノ上
手ニテ川向ノ敵三騎打テ落ス

松原自休手録云石カ瀬重テノ合戦去年働小

川敵ヲ雖追入在精兵近郷ニ揮威聞テ逐一戦

寄ラル小川勢モ石カ瀬へ打出見知越晴ナル

戦也云々

上杉輝虎河合狀云十日ノ旭出テ高野上リ見

テ輝虎一方ノ勢ヲ見テ他陣ノ守リ

旗也志先ノ色ヲ見テ近々ノ便所在中也方

より其陣ヲ合テ入ル黒烟立戦家先々々

先覚聖守信玄先自願面ニ帝々侍尉景宗穴山

伊豆守精合七百人弓手妻手打双有々に切合

破入退立支寸し其片玉の汗を流戦疲味方

息絶ふ痛死人啜血息絶子多信玄カ別玄

其持身命防戦敵ノ輝席カ先手掃掃柴田支使

其地立輝掃旗中ノ左右ノ別部所余被取軍

ハ

武蔵業話云布施以命古傳ハ安田勘助高力品

書是等ハ上杉敵の精々ノ小川ニ縋テ返リ合

火を焚テお戦ハいつても皆粉骨を成ラシ

討死す

古兵

保元物語云景重門ヨリ西築地ノ犬走ニ打テ
出長刀脇挟テ立タリカタヘノ者トモ是ヲ見
テ古兵ナレハオソロシサヨ軍モセテ休トコ
ソ申ケレ

平家物語云宣化景重宣化急満院ヲ捕源氏ノ令ヲ
受テモウラニ延させたまひぬんとやおもし
ろん大太刀大太刀左右よもつて敵の中をわ
つて出宇治河へ飛入物具も皆に水の底を

くくつて向ひの岸にそ急にけりさき取はえ
しりあがり大音聲をあげていかに平家乃君達
等追ははたさかよりといひ侍て三井寺へ
あそかたりとれ飛降り景重の古侍もものろて
みそれいけまきれよとて定て南都へやあち
させ給らんといひし甲冑ある騎鞍籠を合て
追うけまれ

又云嗣信宣化宣化後多事実其ハ古きよてみりて
も破の軍を付せし先由裏へ乱入まよふ火を放
て序時の煙と焼拂ふ

軍兵

平家物語云 麻谷系 新大納言成親の室山
子多姓大寺花山院を袖にきたる人は山崎
平家の次男定盛に越え建ぬる一と遠根の
次男をれいとうと志て平家を亡して中室を遂
人と宣けるこそおろろと建父の母殿に
わつあま中納言をまてこそ玉らましとて末
子として信正二位右大納言のあまの大国あま
たねてゐる是 垣朝恩にあらまはる何の石足
てかゝるふんはうれきん偏に天魔のふた

とみえし平家も越後中納言の信頼
同のあひに既に誅せしはしとて小松後
やうくにしりて頭をけりしは其思也
忘れて外人もおきあふ其具をそのく軍兵
をわしむちき朝夕といふ事合戦のい
あゝの外ハ又他多ありとみえあり

後愚昧記云 永和五年後四月十四日朝間小雨
即属晴未初刻武士等多上邊江馳上之由路人
稱之仍開富小路西門見之自河原方軍兵数万
騎一條西行万里小路北行大樹上亭
今出川邊
号花御所

事出来之間馳参之由称之云々
松原自休手録云從江州飛脚到来ノ淺井カ告
反逆信長大キニ驚キ閣當手ノ退治淺井ヲ可追
ト討木下藤吉郎ヲ金カ崎ノ押ヘニ残シ落下
ヘ被入軍兵諸大将不取敢引退云々

豆相記云永禄十一年十二月伐甲駿今川氏真
出奔于遠州矣故相氏政張旅豆州三島中略甲武
田信玄使武田典厩一万軍卒比薩埴小崎矣

馬強

東乱記云小弓義明合戦茶義明ノ御馬ハ奥州ノ葛西

殿ヨリ六郡一ノ名馬トテ去年進マシラセラレタ
リケル三戸夕子ノ早馬カケ馬ノ逸物ナレハ
主ハ本ヨリクツキヤウノ兼手ニテ人ヨリ一
タン計先立テ敵軍ヘ馳入アフミノハナハサ
ハルヲ幸ト踏タヲシ切り落ス是ツ大将ト見
テケレハ前後ヨリ取籠吾討トラント責ケレ
トモ本ヨリ馬強ナル打物ノ達者ナレハ自武
勇ノ人ニ勝レタルヲ憑テ軍立大早リニテ逃
ル敵ヲ追立テ切テ落シ味方ノ兵モツミカサ
ルニ大勢ノ中ニ懸入ケル

馬上射手

太平記云 山徒寄 京都条 山門已ニ来二十八日六波羅
へ可寄ト定ケレハ末寺末社ノ輦ハ不及申所
縁ニ隨テ近國ノ兵馳集事雲霞ノ如ク也廿七
日大宮ノ前ニテ著到ヲ付ケルニ十万六千余
騎ト注セリ大衆ノ習大早無極所存ナレハ此
勢京へ寄タランニ六波羅ヨモ一タマリモタ
マラン開落ニソセンスラント思悔テ八幡山
崎ノ御方ニモ不牒合シテ二十八日ノ卯刻ニ
法勝寺ニテ勢揃へ可有ト觸タリケレハ物具

ヲモセス兵糧ヲモ未ツカハテ或ハ今路ヨリ
向ヒ或ハ西坂ヨリソヲリ下ル兩六波羅是ヲ
聞テ思ニ山徒縦雖大勢騎馬ノ兵一人モ不可
有此方ニハ馬上ノ射手ヲ撰ヘテ三条河原待
受サセテ懸開懸合セ弓手妻手ニ著テ追物射
ニ射タランスルニ山徒心ハ雖武步立ニ力疲
レ重鎧ニ肩ヲ被引片時カ間ニ疲ルヘシ云々

歩兵

源平盛衰記云矢間ヲ間ヲ開テ馬ノ腹ヲ射ル
乗人ト馬ヨリ落ル時ハ歩兵ノ輦ヲ數百人舩

ヨリ下降テ打取ル

番兵

関八州古戦録云 多賀谷重經攻落 多賀谷ハ小

手裏ニ入テ谷田辺ノ城ニ指置ク処ノ河田平

井手等ノ家人ヲ招テ番兵トナシ軍ヲ下妻ニ

皈セリ

伊達日記云有時風雨ニテ人モ不見分時分内

ヨリ七八十人ハ夕カニ成弓鑓計ニテ打出番

ノ者ヲ追散五人討候大和殿ハ陣所ヨリ不助

以前引籠候惣別城中ヨリ夜々方々へ突テ出

一人二人宛被仰付候前代未聞ニ候云々

當番衆

吾妻鏡云建長四年四月三日丙辰御格子上下

事被定人数云々御格子番事 次第 一番陸奥四

郎時茂越後五郎時貞 中 下格子者可為兼燭之

刻限於翌朝者當番衆參上之後可退出當番若

悉有故障之時者雖何箇日先番衆可令參勤云

々

又云元久元年九月十三日戊寅法華堂御佛事

訖兼燭程盜人入別當大學坊盜取先考御遺物

重寶等即馳申之間仰當番衆等雖被明尋犯人
晦跡不知行方云々

結番

吾妻鏡云寛元元年七月十七日壬辰臨時御出
供奉人事依不知其參否每度相催之奈且遲引
基也且奉行人煩也兼令存知之聞御出期者不
論晝夜為令應御要可結番之旨被仰陸奥掃部
助之間以當時不祇候人數令結番之前大藏少
輔行方於小侍加清書所押臺所之上也又就在
國等雖不知此人數於時隨令參上可被召具之

雖為此衆若有數輩同時故障者可催加侘番人
之由被仰出云々

雜兵

明德記云上総介モ小林モ本ヨリ思定テ打死
センスル合戦ニ驚クヘキニハアラサレト雜
兵ノ手ニ懸リ若犬死モヤセンスラント退岨
シケル氣色コソ見エタリケレ

二水記云永正十七年五月六日高國今度乍催
諸國之群勢不決勝負可謂無念事歛落人之在
所尋出雜兵等煎頭云々

源谷記云皆、足部の大林より身をふせ給中、
下知に通り、不中、協政を難令四十人、取りて、
り、此を中村拾、右の、云、此を河をせ馬より、
突、此を、家来、市、右、門、外、押首、をとり、
羽尾記云能登守曰吾等、八年、老ヌレハ、不惜身
ノ無罪、孫トモヲ始メ、下人、氏ニウキ目ヲ見セ
ンモ口惜イタマシ、只ワレニ任セヨトテ馬
ニ打乗、僕従ニ下知シテ曰敵ヲ打ヘカラス、但
テキ打テカ、ラハ、只撃拂テ、蒐通ア、上田沼
田ノ士、氏多シトイヘ、氏我ト太力組スヘキモ

ノナシ若シ木ノ内八右衛門ナランカトテ難
兵百五十余ニテ突トヲシ出ス
大友興隆記云、梓口軍、佐伯勢、其、案内者、
左右の尾、漆物、ク、者、より、む、ふ、と、志、り、
伏、際、あ、く、き、り、合、さ、し、か、ひ、引、て、軍、の、
さ、ふ、又、七、八、十、騎、抜、刀、の、難、令、先、よ、
寺、を、奉、
伊達日記云翌日石川大和守ヲ頼城中ノ者命
被相助候ハ、明渡可申由ニテ廿五日七ツ時
分出城候伊達ハ、被相返間敷由ニテ表立候

衆ハイツレモ御旗本ニ罷有候雑兵ハ夜ニ紛
伊達へ逃帰申候

甲陽軍鑑末書云天文廿三年八月廿六日信玄
公木曾口へ御馬ヲ出サレシニ瀬場ト云侍降

参イタシ九月末ニ甲府へ召ツラレ次ノ年
典厩甘利ニ被仰付甲府一蓮寺ト云時宗寺ニ

テ御成敗也雑兵共ニ二百十三人瀬場ト一度
ニ切死ニスル典厩甘利衆ニ手負死人アル也

柴田退治記天守高聳以多勢欲攀之以弓鉄炮
打之以長道具貫之懸共具足被疵者多故秀吉

下知而雜兵除之選出六具差固勇士数百人手
鐘打物許攻入天守内

續撰清正記云清正庄林杏本々領軍の考と
もり可（さ）と款の中へりり之（さ）錢を入あり

戦中略款の款四百十之討云清正終ニ搦利
也えぬふみ？討此の侍九十一人雑兵二百七

十九人云正十七未未月五日辰の上別ト午
乃別ト合戦也

松原自休手録云遠州森ト云処ニテ道遥軒家
康ノ本多作左衛門本多平八郎柳原小平太ト

及一戦打負穴山一條二手ニテ押返ス山縣ハ
小屋落シニ遣難兵一騎懸ニ森ハ懸付去氏家
康方備ヲ立ル故山懸ニ引取云々

天正記云江小岳款あひ十町十伍町子守手に

人数を々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

吉馬六七きはう難々々々々々々々々々々々々々々々々

くくく打らせ款乃多むらもり林々々々々々々々

たく人馬のていやくやくやくやくやくやくやく

傳示ようちうり志々々々々々々々々々々々々々々々

從兵

吾妻鏡云治承四年八月廿三日癸卯今日寅剋

武衛相率北條殿父子盛長茂光實平以下三百

騎陣于相模國石橋山給此間以件令旨被付御

旗上横山四郎惟重持之父頼隆付白幣於上箭

候御後爰同國住人大庭三郎景親俣野五郎景

久河村三郎義秀中十人略之并熊谷二郎直實以下

平家被官之輩率三千餘騎精兵同在石橋山邊

兩陣之際隔一谷也中略今日已雖臨黄昏可遂合

戦期明日者三浦衆馳加定難喪敗歿之由群議

事訖数千強兵襲攻武衛之陣而討源家從兵難
比彼大軍皆依重旧好只輕命郊死云々
又云文治五年閏四月卅日癸未今日於陸奥國
秦衡襲源豫州略中豫州在民部少輔基成朝臣衣
河館秦衡從兵數百騎馳至其所合戰豫州家人
等雖相防悉以敗績云々

先手之兵

武蔭業活々小田系傳の御藩生氏々の攻ふ井細
田の山々岩椒の城を占めたり民部少輔にあり
月三日の夜中より晴きまはる民部少輔に討

致はしむる旨を知らせしと氏房多の旨より丸藤
左衛門をきく一音の銃炮掛りされし中
氏郷よりしるしをききしと存し藩生源
左衛門寺村をきく小田系傳以下あり計り
心掛あり

兵士

吾妻鏡云建久三年十一月二日辛未御堂供養
来月可被遂行之導師下向之間雜事以下為行
政盛時等奉行今日有沙汰海道驛家事國々被
差定奉行足柄山越兵士沼田太郎波多野五郎

河村三郎豐田太郎工藤介等可沙汰云々
又云建久四年七月廿八日壬辰梶原刑部丞朝
景自京都歸參文覺上人狀到着以東大寺料所
分与俗人由事殊陳申云當寺再與事其志太甚
深而民近日巧奸濫之間依不物惜身小僧成敗
以有親族寄之輩為兵士入部國領等若此事為
誣訴之基欲猶入此說之族者永斷今生願望後
世墮無間地獄無浮期之趣載之凡以惡口為事
頗不叶將軍御意云々
又云建仁三年九月二日丁卯能貞云如然之行

粧敢非警固之備謬可成人疑之因也當時能貞
猶召具甲冑兵士者鎌倉中諸人皆可遽駭云々
又云義元三年十月十七日丁丑權僧正歸洛略中
餞送物及數百種刺可獻宿繼兵士之由觸仰相
摸國以西守護人等云々
又云承久元年正月廿七日戊子被遣使者彌源
大兵衛尉阿闍梨乳母子於義村今有將軍之闕吾專當
東關之長早可廻計議之由被示合是義村息男
駒若丸依列門弟云恃其好之故欲義村聞此事
不忘先君恩化之間落淚數行更不及言語小選

先可有光臨于蓬屋且可獻御迎兵士之由申之
使者退去之後發使者件趣告於右京兆云々

士卒

吾妻鏡云建保二年八月十三日丁巳大夫判官
惟信使者參著申云去四日南都衆徒稱有鬱訴
奉移春日神木於木津邊欲入洛之由有其聞之
間在京士卒悉以奉勅定為防禦之向于宇治勢
多之兩途畢云々

太平記云赤橋相摸南條是ヲ見テ大將已ニ御
自害アル上ハ士卒誰カ為ニ命ヲ可惜イテ廿

ラハ御伴申サントテ續テ腹切ケレハ同志之
侍九十余人上カ上ニ重リ伏テ腹ヲソ切タリ

ケル

又云笛吹峠道々ニ関ヲ居ヨトテ裁田山ト信

濃路ニ稠ク關ヲ居ラレタリ夫士卒將ヲ疑フ

時ハ戰不利云事アリ前ニハ大敵勝ニ乘テ後

ニ御方ノ國々ナレハ今夜一定越後信濃へ引

返サンスラント我ヲ疑ハメ軍勢不可有云々

又云足利殿東諸卿議奏有テ急足利宰相高氏

卿ヲ討手ニ可被下ニ定リケリ則勅使ヲ以テ

此由ヲ被仰下ケレハ相公勅使ニ對メ被申ケ
ルハ去ヌル元弘ノ乱ノ始高氏御方ニ參セシ
ニ依テ天下ノ士卒皆官軍ニ屬メ勝事ヲ一時
ニ決候キ然ハ今一統ノ御代偏ニ高氏力武功
ト可云云々
豆相記曰每歲六七月自三浦攻入于小田原而
退去時必風乎馬生河辺而士卒泳游焉而水干
汗馬飯及教度早雲横槊隱兵而不出三浦士卒
蓋懈矣

又云氏盛住駿州及三年而与葛山結婚矣葛山

者天智天皇末孫竹下孫八左衛門之後昆也氏
盛假今川葛山士卒而攻取於豆擊殺將野伊東
等門族移豆萑山城改伊勢飯比奈

輕卒

松原自休手録云利長弟孫四郎率大軍働大聖
寺從小松出輕卒後軍ノ後ハ發鉄炮輕卒ノ
頭敵ノ先手御幸塚へ廻兵時ハ被取籠可及難
儀兼テ計之云々

荒手

梅村論云建武二年十二月八日鎌倉少将

まきれハ誰人等程の少少加ては合カみつき
少切も少切も御軍謀り終るまでこそ我ハの
うかき欲をしうふふ計にて利せねりあり
一うはけあつたもつと御想を越て後向を
しめ合戦をいししを欲あきけをしむ不
せむと案のうちありとて回十日の扱外の下
道扱をいあて天此時と成まつ終り辰の一天
一宮新田後原の大ねもいしをせもや勢こいし
ゆきし一宮柳の御神の車も御勢もいしゆり
太平記云 六波羅 源平互ニ入乱テ黒烟ヲ立テ責
攻条

戦フ官軍多討レテ内野へハツト引源氏荒手
ヲ入替テ戦フニ六波羅勢若干討レテ河原へ
サツト引ハ平氏荒手ヲ入替テ此ヲ先途ト戦
フ一條二條ヲ東西へ追ツ返ツ七八度カ程ソ
揉合ヒタル

又云 三浦大多和 懸シ程ニ義貞モ無為方思召
ケル処へ三浦大多和平六左衛門義勝ハ兼テ
ヨリ義貞ニ志有シカハ 中 略所詮明日ノ御合戦
ニハ義勝荒手ニテ候ハ一方ノ前ヲ兼テ敵
ヲ一當マテ見候ハント申ケレハ義貞誠ニ心

二服シ宣ニ随ヒ則今度ノ軍ノ成敗ヲハ三浦
平六左衛門ニソ被許ケル

箕輪軍記云あ中の城主左近大守忠成爰先

途ニ拒キ一か敵ハ多勢ニシテ新入ヲ

責メタリ味方ハ勢ありハ決シテ旗を卷降参

セリ

愚耳旧聴記云 田舎館掃部 志のあきてもあき

大物ありハ荒手と入シ責メられ次第ニ打死

一三百余の多ク一足も不退降シ戦死を致シ

武家名目抄稿第卅四冊

